2014年10月29日 サイエンティフィック・システム研究会 科学技術計算分科会 2014年度会合 次世代HPCを支える技術 ホーテルオークラ神戸

京コンピュータを使った地盤震動 シミュレーションの現状

理化学研究所 計算科学研究機構 (日本学術振興会PD) 藤田航平

地震・津波災害: 現代日本における主要な自然災害



http://www.cas.go.jp/jp/seisaku/resilience/dai1/siryou6-1.pdf

- 自然災害による人的被害の多くは防げるようになったが、地震・津波による被害は50年間解決できていない
- 初期のスパコンの誕生も1960年ごろ、この50年で飛躍的に発展したHPCで地震・津波問題を解決できないか?

はじめに (1)

- 計算科学の観点から見た地震・津波災害
 - 物理現象自体は単純(e.g., 波動方程式)
 - ただ、領域が広大な割に必要な時空間分解能が高い
- 従来の地震被害予測
 - 物理を3次元で追うことは膨大な計算となるため,統計手法や経験式を組み合わ せて予測
 - 観測データが少ないため大数の法則が効きにくく、信頼性は必ずしも高くない



はじめに (2)

- 物理を3次元で解くことで、地震災害の現象を理解や予測の信頼性を 高めることができると期待
 - HPCのアプリケーションとして世界中で開発が進められている
- HPCI戦略プログラム分野3での「地震・津波の予測精度の高度化に関する研究」
 - 広域の問題を大規模計算で正確に解く
 - 一連の災害現象をつなげて解く(統合地震シミュレーション)
 - ➡ 京の能力・HPC技術を実社会の安全に反映するためのミッション



地震シミュレーションの現状

- 地震災害の3段階を組み合わせて解析
- 従来から「地殻中の波動伝播」と「構造物解析」はHPCアプリケーションとして 盛んに研究されてきた
- 都市スケールの地盤震動問題が重要かつチャレンジングな問題となっている
 - 構造物の地震被害に大きく影響
 - 特定の周波数成分によっては10倍程度の増幅がかかることも
 - 広域・複雑形状・非線形物性のため、特に大規模な問題になる
 - 地震シミュレーション全体の信頼性を上げるために不可欠な要素



地盤震動シミュレーションの現状

- 地盤震動問題
 - 地表~深さ100m程度の地盤は、堆積や浸食などで複雑な物性分布・形状となっている
 - これを正確に解くには、大規模unstructured FEM解析が適している
- 都市スケールの3D地盤震動シミュレーションは可能になりつつある
 - 空間分解能4m,時間分解能2.5Hz
- その一方で,計算コストが大きいため,
 - 構造物の応答に支配的な分解能(15Hz)は達成できていない
 - 複数回の計算ができないため,結果の信頼性を確かめることも難しい
- 高速な大規模unstructured FEM解析が地盤震動シミュレーションを実用につなげる ために不可欠



[1] Ichimura, T. et al., Journal of Pressure Vessel Technology, 2014.

大規模unstructured FEM解析の必要性

- 地盤震動問題だけでなく、地震・津波問題全般において、「形状を正確に解く」ことが重要になっている
 - 津波入力の推定精度の向上:形状を正確に反映した計算で、観測データを使った断層状態の推定精度向上が期待できる
- 「大規模unstructured FEM解析」は地震・津波問題の基盤的な手法に
 - 陰解法・非構造格子という性能の出しにくい問題だが、意義の大きい問題



大規模unstructured FEM解析

- 陰的な時間積分を使うため、疎行列線形方程式ソルバーが重要
- 機械・原子力などの工学分野で長く研究されてきた
 シェル・パイプなどの薄い・細い部材などにより、性質の悪い大規模問題となる
 FrontISTR, ADVENTUREなど高性能並列解析ソフトウェアが開発
- 地震・津波災害系の問題:
 - 地盤・地殻といったバルクのある問題のため, 性質はそこまで悪くないが, より 大規模な問題
 - 本研究はここを狙う



車体:大部分はシェル部材の組み合わせ



地殻・地盤:中の詰まった固体

問題設定

- 離散化された波動方程式を解く
 - 非線形物性のため、各ステップでマトリクスが変化
 - 毎ステップ,大規模な対称疎行列の線形方程式を解く問題に帰着
- マトリクスが変化するため,高性能前処理はコストが見合わない
- その一方で、静的問題よりも対角項が大きくなるので、マトリクスの性質はそこまで悪くない



Force vector

使えそうな方法

- マルチグリッド法
 計算量を減らす
- 精度混合演算

 計算コスト・要求B/Fを減らす
- Element-by-element法 – 要求B/Fを減らす
- など...



 それぞれ有用だが、組み合わせることでこの問題をより高性能で 解けないか

使えそうな方法

- マルチグリッド法
 計算量を減らす
- 精度混合演算

 計算コスト・要求B/Fを減らす
- Element-by-element法 – 要求B/Fを減らす
- など...

 $\mathbf{b} = \mathbf{A}\mathbf{u}$ Matrix-vector product $\mathbf{b} = \sum \mathbf{A}_{e}(\mathbf{x}_{e}, \mathbf{c}, \boldsymbol{\rho})\mathbf{u}_{e}$ Matrix-vector product (for each element) computed by elementby-element method Element-by-element法: 要素毎に行列ベクトル積を計算・足込み

 それぞれ有用だが、組み合わせることでこの問題をより高性能で 解けないか

GAMERA

- これらのHPC手法を組み合わせて、地盤震動問題を高速に解く
 - multi-Grid method
 - Adaptive conjugate gradient method
 - Multi-precision arithmetic
 - Element-by-element method
 - pRedictor with Adams-bashworth method

Tsuyoshi Ichimura, Kohei Fujita, Seizo Tanaka, Muneo Hori, Maddegedara Lalith, Yoshihisa Shizawa, and Hiroshi Kobayashi, Physics-based urban earthquake simulation enhanced by 10.7 BlnDOF x 30 K time-step unstructured FE non-linear seismic wave simulation, SC'14, Gordon Bell Finalist, in press.

GAMERA, solver for wave amplification problem

- Solve preconditioning matrix roughly to reduce number of CG loops
 - Use multigrid method to reduce compute cost of preconditioner
 - Use single precision in preconditioner to reduce computation and communication
- Parallelized using MPI, OpenMP, auto parallelization



Performance measurement

- Problem setting
 - 94,407,951 DOF with element size of 1 m
 - Duplicated in *x*, *y* directions to make problems with periodical geometry



Size-up scalability of GAMERA

- 計算ノードあたりの問題規模を一定に保ったまま,並列数を増やす
 - 非線形波動場解析を100ステップ解くのにかかった時間を計測
 - 陰解法・低次要素・非構造格子という性能の出しにくい問題だが、京全系 でsolveできている



Speed-up scalability of GAMERA

120億DOFの問題を並列数を変えて計測



Effectiveness of algorithm

- GAMERAのアルゴリズムの効果を計測
 - 京全系を使って計測(82,944ノード,270億DOF)



*Use 3x3 Block Jacobi method for preconditioning

Portability of GAMERA

Intel系のCPUを使ったStampede を使ってGAMERAのポータビリティを検証
 単精度計算の速い計算機を使うことで、精度混合演算がより効果的になる



適用例:問題設定

- 3層の地盤構造・13,275棟の構造物からなる2.0 x 2.0 kmの領域(新宿付近) ٠
- 地盤工学会提供のデータをもとに地盤モデルを作成



Interface between layer 1 & 2

Curface to:	
	Jology

Bedrock

Layer	1	2	3
<i>V</i> p (m/s)	1,210	1,380	1,770
<i>V</i> s (m/s)	150	255	490
Density (kg/m ³)	1,500	1,800	1,900
Damping	$0.25(h_{\rm max})$	0.05	0.005
Strain Criteria	0.005	-	-

適用例:解析モデル

- 要素サイズ 0.66 mでモデル化することで, 10,755,536,091 DOF
- 神戸波を入力 (dt = 0.001 s, 30,000ステップ)



計算コスト

 ・ 京コンピュータ36,864ノードを使って、7時間44分 (27,837s)

 91%の時間がソルバーに使われており、実問題でも高性能な
 計算が実行できている



Sustained FLOPS/peak: 12.6% (solver), 11.8% (Total)





• 地盤と構造物の特性を踏まえた被害分布を求めることができる

シミュレーション結果の信頼性確認(1)

- V&V (Verification and Validation)^[3]
 - Methodology to ensure the reliability of simulation results
 - Consists of two phases
 - Verification: check if the physics model is solved correctly
 - Validation: check if simulation results follow the actual phenomenon



[3] An Overview of the PTC 60 / V&V 10, Guide for Verification and Validation in Computational Solid Mechanics, *ASME*, http://cstools.asme.org/csconnect/pdf/CommitteeFiles/24816.pdf

シミュレーション結果の信頼性確認(2)

- 従来は、解析領域の一部を取り出した準備解析により、 メッシュサイズを決めていた
 - 非線形な挙動で局所的に揺れが増幅する箇所では収束が甘く なる可能性がある
- 同じ数理問題に対して、分解能を変えた解析モデルを作成し、解析領域全体の解の収束性を確かめる
 5Hz (ds=2m), 10Hz (ds=1m), 15Hz (ds=0.66m)の3つのモデル
 シミュレーションの信頼性向上に重要なステップ

解の収束性確認

- 地表面でのSI値の分布の収束を確認
 - SI値:構造物の被害を見積もるのに使われる地震動強さの指標
 - 15Hzモデルで, 誤差1%以内に収束



解の収束性確認

• 加速度波形も15Hzモデルで誤差1%以内に収束



構造物応答の収束性確認

- 2階建てRC構造物2棟の変位を比較
 - 5Hzだと収束していないが、10Hzで収
 東



- 形状を厳密にモデル化する手法を十 分な分解能で使うことで、解が収束
- 京+GAMERAによって初めて都市ス ケールで実現







- ・ 地盤震動問題は地震の統合シミュレーションの実現に際して、重要かつチャレンジングな問題
 - 構造物の被害を左右する問題だが計算量が膨大
 - Unstructured FEMの大規模・高速解析が必要に
- ・ 地盤震動問題のためのunstructured FEMの大規模解析手法を開発
 - 計算・通信を減らすことで、スケーラブル・高速な計算を実現
 - 京で実行することで、地盤震動の実問題を有用な分解能で解 けるように
 - 形状を正確にモデル化する非構造格子を使うことで、綺麗に数 理問題が解けている

地震・津波問題のもう一つの側面

- 実問題に適用する際には、地殻・地盤・構造物群などのモデルデータの欠如・不確実性も問題に
 - 例: 広域の都市モデル. 都市のデータは外形の3D情報は あっても, 解析に使う構造データは整備されていない
- 数理問題を高詳細に解くのと同時に、現実問題を計算に反映させる「モデル構築」も重要

- データを有効活用する「自動モデル構築」と、

- 不確実性を結果に反映するための「capacity computing」 を合わせて結果の信頼性向上を試みる

Utilization of GIS data of buildings*



Input: CAD data of buildings

*Hideyuki O-tani et al.: Template-Based Automatic Construction of Building Models from GIS data, COMPSAFE 2014 CAD data is just a set of polygons independently located for visualization

Major Challenge:

Conversion of CAD data to models with element connectivity information

Objective:

Develop a method for automatic construction of building models



CAD data (Polygons)

Automated Model Construction



Automated Model Construction

- Two Major Challenges:
 - Floor shape recognition
 - Assumption of floor arrangement





Results of template fitting



The results of template fitting applied to about 38,000 CAD data of buildings

Threshold of <i>d</i>	Rectangle	L shape	Convex	Fail
0.05	47.8%	11.3%	1.3%	39.6%
0.10	54.6%	26.7%	5.9%	12.8%

Results of template fitting d = 0.000*d* = 0.011 *d* = 0.001 *d* = 0.05 *d* = 0.05 *d* = 0.05 *d* = 0.335 *d* = 0.565

Application



Slabやcolumnの位置を床形状に応じて推定可能

構造物のstochastic modeling

- 都市のモデル化に際しデータが欠如している場合がある
 例: コンクリートの物性. 同じ設計でも, 実際の性能はばらつく
- このような不確実性も被害想定に反映させることが望ましい
 - Capacity computingによる多数ケースの解析で、入力分布に対する 結果の分布を求める



Black dots: observed data by Prof. Noguchi Hirofumi, Colored distribution: fitted bi-normal distribution

構造物のstochastic simulation

13,275棟の都市を10,000サンプル計算
 - 京コンピュータ10,000ノード, 3h56minで計算
 - 応答の確率分布を求めることができるように



構造物のstochastic simulation

全構造物に対して、応答分布を求めることができる
 - 対策の優先度を決める際などに有効と期待



層間変位角の平均応答・最大応答・標準偏差

おわりに

- ・ 地震・津波問題は「広域・高分解能な物理」と、「不確実性を持つ大規模モデル」という二つの側面がある
 - 物理を高詳細で追う capability computing
 - データを有効活用するためのautomated modelingと、その限界 を補うcapacity computing (不確実性モデリング)
 - HPCはこれら2つの側面に対して重要な役割を担っている
- ・ ポスト京への期待
 - 地盤震動シミュレーションは京を使ってverifyできても、 validationには足りない
 - ポスト京の計算能力を生かした多数シナリオの計算による validationやstochastic simulationを行うことで、本当に役に立つ ツールとなることを期待